

一年後の学級の姿とこのために絶対外せないポイント

## 一人ひとりが成長する学級集団づくり

神戸おもちゃばい 中村 力

いよいよ新年度が始まりましたね。始まってしまつと、日々の忙しさに、目の前の仕事をこなしていくのに精一杯になります。この学力研の広場や書籍を読むことで、たまには長期的な視野で学級の未来予想図を描くことも大切ですよ。そんな私は、昨年度肢体不自由児学級の担任として、たった一名の児童を指導する立場から一転、高学年の学年主任を任せられ、三十名以上の子ども達と向き合う生活が始まりました。ペースの違いに眩暈がしています。私自身の教師経験十二年のうち、後半六年間の三分の二にあたる四年間を特別支援学級担任として過ごしました。そして、時を同じくして父親になり、長男も六歳ということ、集団よりも、個と向き合うことが多い六年間でした。そんな少し特殊な状況の中で私を感じたこと、考えていることをお伝えできれば幸いです。



我が子がどう成長したかが一番の関心事です。マズローの欲求段階説は有名なですね。一番低次の生理的欲求は個としての食欲や睡眠欲です。

### ◆学級は、集団の中で個が成長する場所

学級担任という立場は、「一斉指導」や「集団づくり」が主な仕事のため、よほど意識していないと、「学級をどのようにまとめていくか」「授業での学級全体の雰囲気はどうだったか」「手を挙げた子は何人か。」

しかし、その次の段階である安全欲求から尊厳欲求までは、集団の中で、安心・安全で過ごしたい、友だちと関わりたい、そして認められたいという他者との関わりの中で満たされる欲求です。それが満たされると、集団の中で個々が自己実現していくものなのだとは解釈しています。

つまり、授業も学級づくりも、「個↓集団↓個」の視点が大切だということです。だから、今回頂いたテーマである一年後の学級の理想の姿も、最後は、子ども達一人ひとりがその子らしさを学級集団の中で活き活きと発揮できているかに着目したいのです。「勉強苦手でやる気を失っていたAが努力するようになった。」「緊張で授業中発表できなかったBが人前で堂々と話できるようになった」「掃除をいつもさぼっていたCが、担任が見ていない所で一生懸命働くようになった」等と、個々の努力や成長が学級の中できらめいている三学期を迎えるのが、僕の理想です。担任の自己満足に終わらず、子どもも保護者も「このクラスで成長できた。」と思える学級をつくるために絶対外せないポイントを次に述べていきます。

等と、学級集団の方に目が向きがちです。しかし、自分自身が保護者の立場を経験すると、我が子の学級がどうであれ、その学級で過ごさず中で、我が子がどう成長した

### ◆子どもと教師との信頼関係づくり

子どもが成長できる学級集団を築いていくうえで、最も基盤となるのが子どもと教師との信頼関係です。手品や歌などの特技を披露して子どもに人気のある先生。ミニゲームをたくさん知っていたり、長縄とびに取り組んだりして学級を盛り上げるのが得意な先生。これらの先生は子どもたちの心をつかみ、クラスの雰囲気をよくしていきます。これらの集団づくりから、さらにもう一步踏み込んで、一人ひとりの成長や変化に目を向けると、子どもとの信頼関係はより充実していきます。手品や歌が好きで集まってきた子とおしゃべりをする。ミニゲームの中で活躍していた子や場を盛り上げていた子に、「○○さんの一言でとっても盛り上がったね。先生はうれしかったよ。」と個別に声をかける。長縄とびにチャレンジしたふり返りを全員に書かせて、一人ひとりにコメントを返したり、いい気づきをしている子の文章を全員に紹介したりして、個々の頑張りを認める。その他にも、日記でのやり取りや授業ノートへのコメント等、一人ひとりが「先生は自分を見

てくれている」と感じられるようにすることが信頼関係を築くために絶対外せないポイントです。

### ◆学級での安心感づくり

私が願う一つの理想像は、「間違いや失敗を恐れずに何事にもチャレンジする子」です。そのためには、自分のチャレンジを馬鹿にする人がおらず、共感してくれる人がいるという安心感が重要です。まず、先生や友だちの話最後まで黙って聞くこと、そして、相づちや反応を示しながら共感的に聞くこと等の「傾聴」の姿勢を育てることから始まります。こうして聞く集団をつくって、さらに個々を育てていくのです。授業の最後のふり返りに、本時で学んだことと合わせて、参考になった友達の見方や友達の頑張りを書くだけです。そうすること、友達のことを共感的に見つめられるようになり、クラス全体にお互いを認め合う支持的風土が広がります。こうして、どの子どもも安心して過ごせる学級になっていきます。

### ◆学校生活への期待感を抱く

子どもが積極的にチャレンジをして成長していくためには、「このクラスでなら、こ

の先生となら成長できそう。」と期待感を抱かせることが大切です。そのための核となるのが授業です。しかし、ゲームの要素が詰まった楽しい授業やアクティブラーニング型の活動的な授業は、その場は盛り上がったとしても、それだけでは成長への期待感をもてない事に、子ども達もすぐに気づきます。楽しい活動で盛り上がった後に一人ひとりが学んだことを書く、活発な話し合いだけで終わらずに話し合いで分かったことを一人ひとりが書く、というように、授業の最後に個人の時間を設定することが大切なのです。この時間に何がわかって何が身についたかを自分の言葉で振り返るだけで、子ども達は、授業での自分の成長をより確かに感じるようになります。当たり前なことしか書かず、読者の皆様にお叱りを受けそうですが、『個↓集団↓個』という授業の基本的な流れを意識するだけで、子ども達は自分の成長を実感し、授業をはじめとする学校生活全体に期待感を抱くことができるのです。

一人ひとりを伸ばすという少しの意識だけで、学級づくりは大きく変わります。